

善良な未開人の虚像と実像(Ⅲ)

小池 健 男

コンドルセ (一七四三～九四)

コンドルセは十八世紀フランスの啓蒙思想家のなかでは、いちばん若い世代に属していた。早くから数学の才能を認められ、一七六九年には科学アカデミーの会員に、八二年にはアカデミー・フランセーズの会員にまで選ばれた。八九年にフランス革命が起こると、公教育問題を中心に多くの改革案を提示、九一年には立法議会に選出されるに至った。人間に自由と平等をもたらすものは何よりもまず教育だという考えが、この数学者の脳裏にはあったらしい。九二年には『公教育一般組織に関する報告および法案』を議会に上程。しかしやがてルイ十六世の処刑や新憲法の問題をめぐって山岳派と対立、九三年の恐怖政治のもとで逮捕状を出され、欠席裁判で死刑を宣告されるというはめに陥った。

数か月のパリ潜伏後、翌九四年には逮捕され、間もなく獄中で死体となって発見された。状況から見て自殺であったと考えられている。ヴォルテールやルソーやディドロなどフランスを代表する啓蒙思想家たちが、それぞれ大きな仕事を成し遂げたあと、いずれも革命勃発の十年ほど前に、高齢や病のため相次いで世を去ったのに比べると、コンドルセの場合は実生活の面での彼等とのあまりにも大きな相違に、胸を打たれる。

だが一方コンドルセは、こうした不運に見舞われはしたものの、彼等よりも遅く生まれただけに、十八世紀全体の啓蒙思想を概観し総括できる立場にもいた。彼はこの立場を最大限に活用して、パリ潜伏中に『人間精神進歩史』(一七九五)を書き上げて後世に残すことができた。その第二部冒頭の刊行者による序文には、「かれはただ一冊の書籍の助けも借りずに、この素描を叙述することができた」とある。パリの国立図書館蔵の原稿に見られる綴字や表現の無数の誤り(ボルダス社『作品辞典』による)は、恐怖政治の下での潜伏中の執筆という緊迫した状況をまざまざと物語っている。

コンドルセは人間の進歩の歴史を十の段階に分けた。十八世紀末の現在はその第九段階であり、次の段階には明るい未来社会がくるであろうと期待していた。〈善良な未開人〉というわれわれのテーマに関わりのある一例をあげると、コンドルセは現段階でのアフリカやアジア地域に対するヨーロッパ諸国の植民政策を批判したうえで、いずれは先進諸国がアフリカ・アジア地域の解放者となるときがくるであろうと、希望的なあるいはむしろ楽観的な予測を立てている。この先進諸国の植民政策に対する批判は、先に触れたディドロの思想の流れに沿っている。そしてここにもコンドルセの十八世紀啓蒙思想の継承者・総括者としての面目があらわれていると見てよい。

ジャン・スタロバンスキーはその『病のうちなる治療薬』(一九八九)で、コンドルセのこの植民政策批判に注目し、こう述べている。(第一章、七、参照)

「啓蒙の時代の思想——たとえばコンドルセの『人間精神進歩史』に述べられているような——は、植民地の征服を、特に海外におけるキリスト教伝道の熱気を、断罪している。伝統的に野蛮人たちに当てられていた形容詞（〈血を好む〉〈暴虐な〉〈愚かな〉など）は、植民者、伝道者など、旧大陸で未だに古い〈迷信〉にすがりついている人々に当てはまるものだ。」

そしてさらに、「ここでやや長い引用をするが、それだけの意味はある」とあらかじめ断わりのことをそえて、コンドルセ自身の発言から次のような引用をしている。ここでは二ページにわたるその長い引用の一部を紹介する。

「アフリカやアジアにおけるわれわれの事業や植民地の歴史を概観していただきたい。そうすればわれわれの商業上の独占、裏切り行為、肌の色がちがう信仰がちがう人間に対する血なまぐさい侮蔑、不法な取得の傲慢さ、常軌を逸した伝道の熱気、聖職者たちの策略などが、初めはわれわれの知識の卓越性や商取引の見事さによって得られていた敬意や好意の感情を、打ちくだくのが見られるだろう。

だがわれわれが彼らに、彼らを腐敗墮落させる者、専横にふるまう者としての姿を見せる時は終わり、彼らの役に立ち、心のひろい解放者となる時が、おそらく近づいているのである。」

たしかにコンドルセのこの考えは、後から見ればあまりにも楽観的な希望的観測であったとみなされてもしかたあるまい。ヨーロッパ諸国は「心のひろい解放者となる」どころか、その植民政策は十九世紀を通じてますます強力で押し進められていったのだから。しかしだからこそ、コンドルセのこうした発言の理想主義的な先見性の意義もまた、より高く評価されるべきものではないだろうか。たしかにコンドルセは理想主義者だった。山岳派によって欠席裁判で死刑判決にまで追い込まれながら、なお人類の未来に希望を託し、不当な死を目前にしながら『人間精神進歩史』を書き上げることができたのだから。

またここで〈政治家〉としてのコンドルセが、文明諸国の植民地主義を批判するにあたって、「アフリカやアジアにおけるわれわれの事業や植民地の歴史」と言い、アメリカ新大陸やその先住民についてはあまり触れていないことに少しこだわってみたい。これは潜伏中の匆忙の間に書かれたための単なる言い落としなのか、それとも意識的な除外なのか。モンテーニュにならってフランスの啓蒙思想家のお馴染みになっていたはずのアメリカの先住民、つまり〈善良な未開人〉は、もうコンドルセのような〈政治家・思想家〉からもさほど注目されないまでに、植民地向けの奴隷としての〈価値〉が低下してしまっていたということなのか。そして代わりにアフリカから買い集められた黒人奴隷の〈価値〉が相対的に高まっていたということなのか。ともあれこの段階でのコンドルセは、アメリカ先住民に対する配慮よりも、黒人奴隷に対する配慮を優先させているように思われる。残念ながら未見であるが、コンドルセは、匿名の『黒人の奴隷状態についての反省』なるエッセーも書いているのである。

シャトーブリアン（一七六八～一八四八）

十九世紀の初頭、シャトーブリアンは『アタラ』（一八〇一）で、インディアンの少年シャクタスと少女アタラとの悲恋物語を書いて大きな反響を巻き起こした。シャトーブリアンはフランスの古い貴族の出身だが、父の代にはすでに没落していて、そのために父は黒人奴隷の売買によって巨富を得、一家を〈再興〉したと言われる。生まれたのはブルターニュ半島の港町サン＝マロである。九一年にはアメリカに渡り、ナイアガラ瀑布一帯を歩き回って大自然の驚異に触れ、多くのノートを取った。まだ二十三歳の若さであった。翌年帰国、フランス革命がしだいに過激化の道をたどるや、

反革命運動に参加するが挫折。イギリスに逃れてみじめな亡命生活を送った。革命で権威を失墜したキリスト教の復権を目指し、大著『キリスト教精髓』を手がけ、この著作の挿話の一つとして書かれたのが『アタラ』だった。シャトーブリアンはこの小説を手始めに、文学者として大成していった。一方政界にも進出し、フランス革命終息後の王政復古の時期には、大使職や大臣職を歴任した。

この小説『アタラ』の舞台はルイジアナ周辺で、時代は十七世紀後半。一七二七年のナチェズ族による多数のフランス人殺害事件と、その後の数年間のフランス軍によるナチェズ族の撃滅作戦からヒントを得ている。物語の構成は、外国の軍隊や他部族との抗争からわずかに生き残ったナチェズ族の指導者となっている年老いたシャクタスが、ヨーロッパの文明社会を捨ててシャクタスの養子になったフランスの青年ルネに、若いころの恋の思い出を語るという形をとっている。敵対していた部族の捕虜となったシャクタスに、族長の娘アタラが思いを寄せ、二人は部落から脱出、追っ手を逃れてアメリカの大草原、大森林のなかをさまよう。アタラは病に倒れるが、実は世をはかなんでの服毒だった。瀕死のアタラの告白によると、彼女の母親はキリスト教に改宗した先住民だったが、ほんとうの父親は族長ではなく白人だった。母親は娘の身を案ずるあまり、キリスト教の神以外の者との結婚を禁じて死んだために、アタラは母の呪縛に対する恐れとシャクタスへの愛との板ばさみになって苦しんでいたのだった。結局二人の恋は実らずにアタラは死に、シャクタスはキリスト教の威力を身にしみて味わい、後に改宗するが抗争によって命を落とす。

この小説の舞台は言うまでもなくアメリカ大陸の大自然であり、シャトーブリアンは時期的にいかに自然礼賛のルソーの後継者のようにみえるが、大自然を舞台にしているからと言って、それだけではルソーの後継者ということにはならない。シャトーブリアンは『アタラ』の序文でむしろそれとは逆のことを言っているのである。「私はルソー氏のような未開人の心酔者ではない。(中略)〈まったくの自然状態〉がこの世で最も美しいものであるとは信じていない。私はこうした自然を目にする機会を得たいところで、このような状態がいつでもまことに醜いものであると思わざるをえなかった。思考する人間は〈墮落した動物〉である、という意見にくみするどころか、私は思考こそ人間を人間たらしめるものだと思っている。この〈自然〉という言葉のせいで、何もかも台なしになってしまった。」つまりこの序文に関するかぎりでは、シャトーブリアンは未開人を善良とは認めていないし、自然状態を礼賛してもいない。それはむしろ醜いものだった。自然はすべてを台なしにするもので、思考能力こそが人間の本質だということになる。

ともあれこの小説はシャトーブリアンの名文とアメリカの大自然という新鮮な魅力を持った背景とが効を奏して熱狂的に迎えられ、シャトーブリアンの意図したキリスト教の復権に、フランス革命でおとしめられたキリスト教の復権に、貢献した。また小説の序文で未開人を善良とは認めないとの発言をしているにもかかわらず、大自然のなかに住む先住民たちへの情動的な共感もおおのずからあらわれていて、彼等の印象をよい方向に高めるのにも役立ったはずである。

最終章ではナチェズ族が、仲間の復讐のために来襲したフランス軍によって壊滅的な打撃を受けた事情が明らかにされるが、作家シャトーブリアンの胸のうちでは、ナチェズ族という先住民の一部族がかつてフランス軍の憎悪的となって撃滅されたという、未開人のイメージにとってはむしろマイナスの面と、未開人のなかにも芸術の対象となりうるすぐれた心情が認められるというプラスの面が、さほどの矛盾も反省も起こさずに両立していたらしい。

ユゴー（一八〇二～八五）

シャトーブリアンが十九世紀前半のフランスを代表する大作家だとすれば、ヴィクトル・ユゴーはこの世紀と共に生まれて世紀全体を通じて活躍した大作家である。十四歳のユゴーが日記に、「シャトーブリアンのような人物になりたい。それ以外はいっさいごめんだ」と書いたというのは、文学史の有名なエピソードだ。ユゴーは詩人として大成した以外に、『ノートル＝ダム・ド・パリ』『レ・ミゼラブル』『九十三年』など数々のすぐれた長大な小説作品を書いているが、ここでとりあげるの是一般にあまり知られているとは思えない『ビュグ＝ジャルガル』という中編小説である。天才少年だったユゴーは十六歳のときに同人雑誌のためにこれを書き、その後手を加えた。決定稿は一八二六年である。舞台は現在のドミニカ共和国の首都サント・ドミンゴのプランテーション。時代は一七九一年で、フランスでは革命の騒動のさなかであり、またドミニカがスペインからフランスに譲渡される数年まえのことで、実際に起こった黒人の暴動を下敷きにしている。

主人公のビュグ＝ジャルガルは体力、知力ともに並みすぐれた黒人奴隷。八百人もの奴隷をかかえるプランテーションのフランス人所有者は強欲だが、娘のマリーは心がやさしく、所有者の甥で後継者に予定されているドーヴェルネ大尉と婚約中。ビュグ＝ジャルガルはこのマリーに思いを寄せる。

折りしもプランテーションに暴動が起こり、所有者は殺され家屋は火に包まれるという事態となつて、マリーは黒人奴隷に連れ去られる。ドーヴェルネは追跡するが、かえって捕虜になり、殺されるはずのところ、ビュグ＝ジャルガルに命を救われる。マリーを連れ去ったのは実はビュグ＝ジャルガルであり、それは暴徒たちから彼女を守るためだったことが後でわかる。

この小説の主人公がアメリカの先住民ではなくて、アフリカで買い集められて連れてこられた黒人、あるいはその子孫であることにまず注目しよう。そしてこの主人公がヨーロッパ人に劣らぬ人間性の持ち主として描かれていることにも注目しよう。ユゴーがどの程度人種問題に関心を抱いていたかはつまびらかにしないが、この小説に描かれているかぎりでは、きわめて黒人に好意的である。奴隷問題を別にしても、ユゴーが熱烈な人道主義者だったことは、あの有名な『レ・ミゼラブル』の多くの場面にあらわれている。『ビュグ＝ジャルガル』に描かれた黒人奴隷の暴動が、その後の奴隷解放運動の発端となり、一八〇四年のハイチ独立への第一歩となったことも、同じように注目に値するだろう。

この小説の序文（筆者不明）の表現を借りれば、この黒人奴隷の暴動には「三つの世界が巻き込まれていた。戦いを行ったのはヨーロッパとアフリカであり、戦場はアメリカだった」のである。かつて十六世紀半ばにラス・カサスが憂えたとおり、その後のアメリカ先住民の人口減少は著しく、それを補うために移入された黒人奴隷がついに舞台の正面に躍り出る事態にまで至ったわけである。シャトーブリアンの未開人に対する水面下の心情的な共感は、ユゴーにおいては多分に顕在化し、政治的なニュアンスを帯びてきたと言ってよいだろう。なおシャトーブリアンが後には大使や大臣を務めた政治家でもあったとは前に触れたが、ユゴーもまた晩年は国会議員として活躍した政治家でもあった。

ダーウィン（一八〇九～八二）

『種の起源』（一八五九、六〇）によってあまりにも名高いダーウィンは、この著書の基礎となる資料を、イギリス海軍の調査艦ビーグル号に同乗した数年間（一八三一～三六）の体験から得た。日記体の『ビーグル号航海記』はまず公文書による報告の形で一八三九年に刊行され、その後、版を重ねた。

ダーウィンの乗ったビーグル号には、南米の最南端パタゴニアの突端の先住民の三人が同乗していた。彼等は先の航海のときに、艦長のはからいで数年間イギリスに招かれ、文明社会を体験したあと、予定どおり生地に送り届けられる途中だった。『航海記』の第十章「ティエラ・デル・フエゴ」は彼等とその部族の観察記録である。冷静な観察者ダーウィンも、この強風と低温と荒海の、あまりにも苛酷な自然環境に置かれた部族の心の荒れすさんだありさまに、度を失っている。「あのみすぼらしい下等な野蛮人」「今までどこでも見たことがないほど、いやしい、みじめな」「皮膚は汚く脂ざり、髪はちぢれて入り乱れ、声は調子外れで、動作は粗暴」「こんな人間を見た者は、彼等がわれわれの同類で、同じ世界の住民だとはほとんど信じられまい」と、さんざんである。「眼にふれるあらゆるものを欲しがり、できる限り盗む」のはもちろん、「冬期に飢えて窮迫すると、犬を屠殺する前に、老婆を殺して食うことは確実である」とまで言い切っている。ここには〈善良な未開人〉を予想させるものは、ほんのひとかけらもない。

前世紀の後半にフランスの探検家ブーガンヴィルは、この地に立ち寄ったときの観察記録で、もう少し落ち着きを見せていた。悲惨な環境に置かれていながら、他の世界を知らぬゆえに「自らが持つものに満足している人間」「実際、これらの未開人を見ると、どれほど哲学談議にふけるのが好きでも、この自然状態にある人間を文明人より好ましいなどと思うことは不可能であろう」と。

唯一の救いは、ダーウィンが、イギリスで教育を受けた三人のうちの一人、比較的まともなジェミー・バトンについて、「いつの日か、難船した船乗りが、彼の子孫およびその部族の者によって、援助を受けることを、切実に願望してよいと思う」との期待を捨てていないことである。しかしこの期待も、実はダーウィン自身によって、次の章では否定されている。これほどの苛酷な自然環境のなかでは、次第に動植物の数が減じ、「最後にこのみすぼらしい国のみすぼらしい君主であるフエゴの蛮人どもも、その食人の宴をますますくり返しつつ、人口を減じ、おそらく生存しないものとなるであろう」との予測が記されているからである。

さてこの『航海記』のハイライトは、何と言ってもガラパゴス諸島での観察記録だが、ガラパゴスはわれわれの当面の目標ではない。ここで取り上げるのはガラパゴス諸島の次の寄港地タヒチ島である。『航海記』では第十八章の前半がタヒチ島にあてられている。ビーグル号は一八三五年十一月十五日から二十六日まで約十日間、この島に碇泊した。ダーウィンが毎日のようにつけていた日記には、もちろん動植物の観察記録もないではないが、ガラパゴスでの驚くべき体験や発見のあとでは、タヒチでのそれはさほどのことはない。ダーウィンの関心的はむしろ「南海の航海者にとって、永久に古典として残るべき島」の島民たちであり、彼等の生活形態にあった。

十一月十五日の記録。「マタバイ湾に碇泊すると、ただちに独木舟に包囲された。(……) 上陸すると男女子どもの一団が、笑みをたたえた陽気な顔つきをして」迎えてくれた。先住民たちによるこの外来者の歓迎ぶりは、数十年前のブーガンヴィルのタヒチ寄港のときの歓迎ぶりとはほとんど変わらない。ダーウィンは「住民に対して、この上もない好感を持った。」彼等の「表情は柔和で、蛮人の観念は即座に消失」した。彼等の褐色の肌にも違和感をいだくことはなかった。「白人がタヒチ

人と並んで水浴するときは、園丁の世話によって色のあせた植物を、野外の勢いよく茂るみごとな濃緑色のものに比する感」があった。「ほとんどの男のしている文身さえも、体の曲線によく適合して、すこぶる優美で、きわめて優雅な趣を」そなえていた。女性たちの外観には、ダーウィンはどういうものかひどく失望したのであったが、残念ながらその理由については何も触れていない。

十八日、ダーウィンは島の最高峰オロヘナ山（二二四一メートル）を目指した。ところが同行の島民たちは持ち物をまったく用意しない。山にはいくらでも食べるものがあり、着るものは皮膚だけで十分、というのがその理由だった。彼等の言うとおりに、手をのばせば取れる果物と、水にもぐってつかまえる川魚と、木の棒をこすり合わせて起こした火で、十分な食事ができたし、バナナの葉を使って数分間でこしらえたテントで夜露に濡れずに眠ることができた。

二十日、キリスト教会での集会を見て、「ヨーロッパで、これほど陽気な幸福そうな顔をした聴衆を、この半数も集めることは困難であろう」との思いをいだいた。敬虔な信者でもあったダーウィンは、「不正直、飲酒、淫蕩などが、キリスト教の移入によって大いに減少した」ことについて、伝道者たちの努力を好意的に評価もしている。

そしてタヒチ碇泊の最後の二十六日、ダーウィンは、「あらゆる航海者が賛美の貢物を捧げたこの島に」別れを告げて、次の目的地ニュージーランドへと向かったのだった。

ダーウィンによるタヒチ島と住民の観察記録は、生物学者による客観的な記録であることが特に重要視されるであろう。タヒチはやがて作家や芸術家の注目を集めるようになるが、そうした人々にとってむしろ大切な個人的な好悪の念や虚構性などから、ダーウィンは生物学者として比較的免れでいたであろうと考えられるからである。それにしてもティエラ・デル・フエゴとタヒチとの自然環境、それに由来する住民の民族性などのあまりにも大きな落差には、創造の歪のようなものを感じないわけにはいかない。

ディケンズ（一八一二～一八七〇）

これまでのところ西欧文明社会の作家・思想家による〈善良な未開人〉さがしと、その結果、つまり彼等の実像と思われていたものが、ほぼそのとおりであったこともあれば、実は虚像に近かったことも往々にしてある、ということをもさまざまな例に基づいて検討してきた。ところが多くの意見のなかには、そのような検討などまったく必要がないし、もともと未開人が善良だなどということはありません。そしてその代表格はチャールズ・ディケンズであろう。

ディケンズが一八五〇年に創刊した《家庭の言葉》（ハウスホールド・ワーズ）と題する週刊誌の記事がその一例である。ハウスホールド・ワーズとは「ふつうに使われる言葉、言い回し」の意味だと辞書にある。集英社版『世界文学大事典』の小池滋の署名入り記事によれば、この雑誌はディケンズが「経営・編集・執筆の一部をすべて担当するワンマン週刊誌」だった。その一八五三年六月十一日号の〈高貴な野蛮人〉の記事はすさまじい。のっけから「まず要点を明らかにするために、私はいささかも〈高貴な野蛮人〉説を信ずるものではないと言っておく。私は〈高貴な野蛮人〉をひどく不愉快な者、とてつもない迷信の所産と考える」と始まる。なお〈高貴な野蛮人〉（ノーブル・サヴェジ）とは、〈善良な未開人〉（ボン・ソーヴァージュ）の英語流の表現である。

この雑誌は、小池滋氏によれば、すべての記事が無署名だったが、この資料を筆者に提供された甲南大学の松村昌家教授によれば、〈高貴な野蛮人〉の項はディケンズが書いたものであることが確認されているとのことである。

以下にその最もあからさまな数例を、かいつまんで紹介してみよう。

「自分の顔に魚の骨を刺そうと、耳たぶに木片を刺そうと、頭に鳥の羽を刺そうと、私にはどうでもよいことだ。髪の毛を二枚の板にはさんで平たくしようと、鼻を顔のはばより広げようと、下くちびるに大きなおもりをつけて引っぱろうと、歯を黒く染めたり抜き取ったりしようと、一方のほほを赤くもう一方を青く塗ろうと、からだに入れ墨をしようと、油を塗ろうと、獣脂でこすろうと、ナイフで刻みをつけようと、私にはどうでもよいことだ。こうした突拍子もない楽しみのどれに従うにしても、彼は残虐で、うそつきで、どろぼうで、人殺しの野蛮人なのだ。」「それなのにある種の人々が、よきなつかしき昔を語るのと同じように、野蛮人について語るのを見ると、まともだとは思えない。」

この週刊誌はまた野蛮人の実例として、イギリスで〈展示〉されたことのあるブッシュマンの男女二名ずつが、いかに汚くて、水を嫌い、足はがにまたで、クーウーウーアと叫んでいたことを考えて見よ、と書いている。こうした表現はズールー族のグループの〈展示〉の記述についても、ほぼ同様である。またこの記事は、一般的に戦いに際しての野蛮人の獐猛さを訴え、敵の血をすすり、肉を裂き、骨を砕くさまは、まさに虎、豹、狼、熊のようだと述べ、結論として、〈高貴な野蛮人〉の美德とは作り話であり、幸福とはまやかしであり、高貴とは無意味であるとしめくくっている。

この週刊誌があげたブッシュマンとズールー族の具体的な二例に少しこだわってみると、この例はいずれもアフリカの黒人の例である。アフリカの北部、地中海沿いの一帯は、古代文明発祥の地だが、サハラ砂漠の奥は十九世紀の半ばにはまだ闇の世界だったのであろう。コンラッドによって『闇の奥』（一八九九）が書かれるよりも半世紀も前のことなのであるから。〈高貴な野蛮人〉説を一笑に付するこの記事は、当時の平均的なイギリス人のアフリカの未開人に対する一般的な感情を代弁したものとみてよいであろう。建て前と本音の、本音の部分が、無署名という隠れ蓑を羽織ってあからさまに表に出たと言ってよいであろう。

この記事が発表された一八五三年は、フランスでゴビノーが『人種不平等論』を刊行した年でもある。（第二部は五五年）フランスでは評判が悪かったが、ドイツでは好評で、各地にゴビノー協会が設立された。白人特にアーリア人種を最優秀と論ずるゴビノー説がやがてナチズムによって利用されることになったのは、歴史の苦い教訓である。

これまでにあげた何人かの作家・思想家の例を思い起こしてみると、コンドルセは『人間精神進歩史』を書くにあたって「アフリカとアジア地域を」想起していた。シャトーブリアンの父は貴族の家柄を守るために黒人奴隷の売買によって巨富を得たのだった。ユゴーの『ビュグ・ジャルガル』もハイチ独立の端緒となったプランテーションの黒人奴隷の暴動をテーマにしていた。こういうことを思い合わせれば、アフリカを研究の対象から外すわけにはいかない。アフリカについては、岡倉登志著『「野蛮」の発見——西欧近代のみたアフリカ』（講談社現代新書）が小型の本ながら、多くの示唆を与えてくれるが、アフリカは別な機会にゆずり、今回はアフリカよりも〈善良な未開人〉さがしにより深い関係があったと思われる南海地域を、特にタヒチ周辺を、探索してみたい。

メルヴィル（一八一九～九一）

十九世紀の前半には、太平洋の島々はまだ十分には開拓されていない領域であって、そこで実在の善良な未開人に会えるかもしれないという期待や可能性は、まだ残されていたらしい。ダーウィンが『ビーグル号航海記』（一八三九）でそうした期待にプラスの方向で応えたことは先に述べた。ここでは南海の〈善良な未開人〉さがしの例として、アメリカ文学のなかからハーマン・メルヴィ

ルの『タイピー』（一八四六）をとりあげよう。メルヴィルは父の死と残された多額の負債のため、自活の道を求めて三九年船乗りになったものの、仕事の辛さに耐えかねていた。南太平洋のマルキーズ諸島の主島ヌクヒーヴァ島で船から脱走、この島にもぐりこんだ。島の中をさまよううちタイピー族の住む谷間にたどりついたが、このタイピー族は食人種で、タイピーという名称そのものが現地語で人肉愛好者を意味していた。メルヴィルは一か月ほど軟禁状態で彼等と生活を共にするはめになったが、やがて補充船員を求めていた捕鯨船に救い出され、タヒチ島をはじめさまざまな体験を経てアメリカ本土に戻ることができた。船乗りの生活は足掛け四年に及んだ。

帰国後タイピー族との生活体験を小説の形にまとめたのが処女作『タイピー』である。その主要なトーンは食人種たちの自然のままの生活の賛美である。食人種とはいえ、この島の住民たちの生活は、底抜けに明るい。彼等の世界には、「労苦も悲しみも、思いも悩みも、なにか一つないように見える。」（国書刊行会版「メルヴィル全集」坂下昇訳、第一巻『タイピー』第十七章参照）彼等との生活を通じて得られたメルヴィルの願いはこうである。

「〈タイピーの谷〉の住人はまだ汚されていず、まったく清浄だった。主よ、願わくは、彼等をして永遠にそうあらしめたまえ！彼等はいつまでも幸福で、無邪気な邪宗徒で野蛮人でいたほうが、ハワイの惨めな人民よりどれだけいいか知れやしない。ハワイの民は真の宗教の本質的な影響はなんにも知ることもなく、しかも同時に文明生活の最悪の悪徳と禍害の生贄にされながら、ただキリスト教徒の名をいただいているだけではないのか！」（同書、第二十五章参照）「天よ願わくは、くいやはての島をたすけさせたまえ！——キリスト教世界が彼らに感じる同情が、ああ、悲しむべし、彼らの破滅のもととなった事例があまりにも多いとは！」（同書、第二十六章参照）

一方、イギリスの慣習つまり文明社会の害悪をあばこうとする意図は、ハワイの例とは比べものにならないほど激しい。「ただの人肉を食らうという所行が、ほんの数年前まで福音を知るイギリスで行われていた慣習よりも遥かに野蛮なのかどうか？——売国奴の罪を宣告された人間、おそらくは誠実、愛国心、その他同類のことで極悪の罪ありとせられた人間なのだろうが、彼の首を巨大な斧で刎ね、臓腑はひきずりだし、火にくべ、死体は八つ裂きにし、刎ねた首は棒に刺し、人の集まる広場で腐り、膿みただれるままに、さらしたではないか！」（同書、第十七章参照）

かつて十六世紀の半ばにモンテーニュは、『エッセー』のなかで、人間を生きたまま焼殺すヨーロッパの文明人と、捕虜を殺してから焼いて食うアメリカの先住民と、果たしてどちらがより野蛮であるかとの問を發して、これが十八世紀の〈善良な未開人〉説の流行のもとになったのであるが、メルヴィルはおそらくそれとは知らずに、モンテーニュの直系の子孫となっていたように思える。十六世紀のモンテーニュの〈善良な未開人〉説も人肉食と表裏一体になっていたが、十九世紀のメルヴィルにおいても、それが同じように抱き合わせになっているのは興味深い。

ところで小説『タイピー』の主人公はやがてこの美しく楽しい島を脱出しようと決意するのだが、それは皮肉にも、それまでまさかと思っていた人肉食の噂がどうも本当らしいと思ひ込んだときだった。しかしそのうわさの真偽は、この小説のなかでは、結局は明らかにされぬままに終わっている。

『タイピー』の好評に気をよくしたメルヴィルは、余勢をかって第二作『オムー』（一八四七）を刊行した。これは『タイピー』の続編にあたり、オムーとは放浪者を意味する現地語。その第一部は救出してくれた捕鯨船での船員生活、というよりもむしろいざこざ。要するに船員たちが船長と対立。自分を含めて船員たちがタヒチで収監されるまでのいきさつ。第二部が船を降りた連中のタヒチ暮らしのてんまつである。第一部はけんか話のごたごたで、いささか憂鬱。第二部もせつかくのタヒチながら、『タイピー』にあったような食人種部落からの脱出という緊張感がなく、小説としては前者に劣るといふ批評が多い。

「メルヴィル全集」第二巻の解説者富山太佳夫氏によれば、「今日の読者の眼には、数ある彼の作品の中でも最も魅力に乏しいものとうつる」そうであるし、そればかりか、第二部のタヒチ関係の「挿話の多くの部分が、ウィリアム・エリス『ポリネシア研究』四巻（一八三三）他の諸著からの借用、引用、いや、剽窃であることが明らかにされている」というに至っては、何をか言わんやの感をいだかぬでもない。タヒチ島とその周辺の島の滞在も、二週間ほどでしかなかったらしい。これではダーウィンの滞在日数とあまり変わらない。しかし『オムー』の第二部のタヒチ関係の記述は、量的にダーウィンのおよそ十数倍、地域的にも広範であり、ダーウィンの記述が信頼性は高いがやや表面的であるのに対して、メルヴィルのほうは島民の生活の表も裏もともに描き出しているように思われる。

われわれとしては、メルヴィルがこうして出所を明かさずに〈不当に〉かき集めた資料の再構成の中に、いくぶんかは作家自身の深い洞察が生かされているものと期待するしかない。

ロティ（一八五〇～一九二三）

『タイピー』の島ヌークヒーヴァはマルキーズ諸島の主島であり、そこから南西千六百キロに位置するソシエテ諸島の主島がタヒチ島である。これらの諸島は現在とともにフランス領である。タヒチ島は十九世紀の後半になってもあいかわらず作家や画家の靈感を刺激しつづけた。フランスの海軍士官ピエール・ロティは、一八七二年、少年時代からのあこがれの島タヒチに寄港し、そのときの数か月の体験を小説『ロティの結婚』（一八八〇）にまとめて、読書界に新鮮なエクゾティズムを吹き込んだ。

「ウエルカム！とボラ・ボラ島の女王も言われ、ほほえんでその食人種の長い歯並びをのぞかせながら、私に手をさしのべられた。」メルヴィルのマルキーズ諸島に、人肉食のうわさがあつたとすれば、地理的に見てソシエテ諸島のほうにも、そのうわさがあつて少しもおかしくはない。ロティはヌークヒーヴァ島で数年前から忘れられている人肉食が、その隣の島ではまだ盛んに行われている、とまで書いているし、ほかにもタヒチ島を中心とする島々での人肉食のことを、過去の習慣としてではあるが、たびたびとりあげている。「白人の肉は熟れたバナナの味がする」と、ある老酋長はロティに語ったのだった。

とは言ってもこの小説のエクゾティシズムは、人肉食に多くを負っているわけではない。それは、危険な動物のいないこの島（何人かのヨーロッパからの移住者を除けば）、原始時代の名残りのように思われるこの島、そして文明との接触によっておそらく次の世紀にはそののどかな生活が失われてしまうであろうと思われるこの島の描写などに多くを負っている。それを象徴するのが、十五歳の少女ララフとの出会い、軍艦の出航までのわずか数か月の間のタヒチふうの結婚生活である。ヨーロッパではまずありえないララフの性格と生活。つまりロティから見れば彼女は大の怠け者なのだが、そもそもこの島には労働という観念がなかったからである。その必要がなかったからである。森はほうっておいても人々を養うだけのものを産み出してくれた。ヨーロッパで貧しい人々が苦しい労働に従事しているなどということは、島の住民には想像もできないことだった。しかし一時は永住まで心に決めながら思いとどまったことに対する苦い悔恨。その後、ララフは身を持ち崩し、文明社会から持ち込まれた結核に冒されて十八歳の若さで死ぬ。こうしたいきさつを、ロティはかぎりない哀惜をこめて、散文詩ともいえるような形の小説にまとめた。それは今から見れば、文明人の気紛れ、思い上がりにすぎない、という見方も成り立つであろうが、またある意味では、〈善良な未開人〉の復活の祈願とも言えそうな作業だった。プーガンヴィルの『航海記』の補遺として書か

れたデイドロのカリカチュアとは趣を異にする、わずかなあいだながら現地で暮らしてみたいうでの、消滅寸前の未開の生活に対する哀惜にみちた憧憬の一形態だった。もっとも現行の版には、カリカチュアならぬエロティックな漫画のイラストつきのものもあるのだが……。

なおロティはタヒチの体験から十三年後、海軍士官として清仏戦争に参加、一八八五年七月、軍艦の修理、点検のために長崎に来航した。一か月ほどの滞在のあいだに、人を介してお兼さんという女性と〈結婚〉し、同棲生活を送った。タヒチのララフとの結婚が現地方式であったのと同じように、短期間の契約結婚であったが、ちがうのはロティは「警察、官憲の前で結婚式」をしたと日記に書いていることである。仲介者の手引きに従って自分なりにけじめをつけたつもりだったらしい。お兼さんとの生活が後に『お菊さん』（一八八七）として小説化されたのは、よく知られているとおりである。

ロティは長崎上陸の第一印象を、「何という緑と蔭の国だろう、日本は！何という思いもよらぬ楽園（エデン）だろう！」と礼賛のことばで始めながら、一方では、蟬の声のあまりの騒々しさに辟易し、品物売り込みに押し寄せる商売人たちを、「それにしても、まあ、この人間たちはいかに醜く、卑しく、怪異（グロテスク）なことだろう！」と、侮蔑的な発言をしている。日本の女性についても「滑稽なほど小さい。陳列棚の骨董品みたいな顔、南米産の猿みたいな何とも言えぬ顔」と言いたい放題である。日本人を猿にたとえた例はほかにもいくつもある。肝腎のお兼さんは、写真で見ると整った顔をしているが、性格は暗いほうだったらしい。ロティの思い出のなかには、お兼さんは、東洋的な神秘的な女性としてはとどまらなかつたらしい。それに下宿の女主人お梅さんはじめ、既婚女性は眉毛は剃り落としていたし、歯は真っ黒に染めていた。

お兼さんはもともと暗い性格であり、おそらく契約結婚を余儀なくされた事情などもからんで、明るい気持ちにはなりえなかつたのであろう。ロティの印象もタヒチのララフのように哀愁に満ちたものとはならなかつた。こういうわけだからロティを毛嫌いしたり、無視したりする日本人がいるのは当然である。たしかにロティには、鼻持ちならぬ人種的優越感がある。日本人の容貌や体躯を悪しざまに言って意に介しない傲慢さがある。しかしロティの来日が明治維新から数十年という時代であったこと、つまり今から数えれば百年以上前のことであることを頭に置いて考えると、二百数十年の鎖国時代のあとによろやく開国したばかりの当時の日本の風俗が、歯に衣着せぬ形で描かれていて、今から見ればこれはこれでむしろ貴重な資料ともなっているのである。

そしてまたロティがそのエッセー『秋の日本』（一八八九）では、必ずしも日本を悪しざまに言うてはいないということも、合わせて考えねばなるまい。

ラフカディオ・ハーン（一八五〇～一九〇四）

ラフカディオ・ハーンは、ロティと同年の生まれである。明治二十三年（一八九〇）の来日以前には、アメリカで新聞記者や翻訳の仕事をしていた。その翻訳のなかにはロティの作品も含まれていて、両者は翻訳を通じて知り合い同士だった。ロティの来日は一八八五年であるから、ハーンの来日はそのわずか五年後である。長い目で見れば、両者はほぼ同じ時期に日本を訪れたことになる。ハーンは新聞記者として日本探訪の記事を書くために日本にきたのだが、横浜に上陸するなりすっかり日本に魅了されてしまった。ロティとちがってハーンは、その職業を捨て、英語教師として松江に赴き、日本女性と結婚し、日本国籍を取得し、小泉八雲を名乗ったことはよく知られているとおりである。

ハーンは幼少のころから家庭的にめぐまれなかつた。その状況は来日のときまでつづいていた。日

本で家庭的なあたたかみを見いだした、というのはごくあたりまえの成り行きであったろう。しかしハーンはそうした人情味をはるかに超えて、自然の風景はもとより、日本古来の八百万の神々、民間伝承、お地蔵さん、お稲荷さん、果ては虫の音にいたるまで、日本のすべてを愛してやまず、それを『知られざる日本の面影』をはじめ、文筆の業を通じて世界に広めた。ハーンはロティとちがって、日本を未開の国とみなしていたはずはない。日本人を未開人とみなしていたはずはない。しかしハーンは日本にきて、期待をはるかに上回る、何かひじょうによいものを見つけてしまった、とは言えるのではないか。そしてそれは、ひょっとすると、探してもいなかったのに見つかった〈善良な未開人〉といったものだったのではなかっただろうか。

日本は未開の国ではなかった、一種独特な文化国家だった。それはそのとおりだが、一方において、遠い欧米の先進文明諸国から見ると、極東の未知の国でもあったという側面もある。ごくまれに日本に布教にきたり、漂着したり、後には出島を通じて通商に従事したりした人々があつたが、開国後は来日した外国人の数は急速にふえた。そうした人々の残した見聞録の類は、ロティのような例外を除いて、おおむね日本にひじょうに好意的である。彼等をはるかな極東の地に、思いもかけずある種の〈善良な未開人〉を見つけたのかもしれない。しかしこのテーマに深入りすることは、今回のテーマから外れることになるので別な機会に期待し、このへんで南太平洋のタヒチに話を戻すことにする。

ゴーギャン（一八四八～一九〇三）

十九世紀後半のタヒチ島訪問の体験を小説化した作家ロティを話題にすれば、同じ世紀の末に、一八九一年から九三年にかけてこの島を訪れ、後にその体験を『ノア・ノア』にまとめた画家ゴーギャンに触れぬわけにはいかない。書かれた時期は特定できないが、早くから手を染め二回めのタヒチ島滞在（一八九五～一九〇一）のときにも、臨終の地ヒヴァ・オア島滞在（一九〇一～〇三）のときにも、手を加えていたらしい。当時雑誌に掲載された、『ロティの結婚』が数か月の体験を昇華させた、多分に文学的な色彩が濃厚な作品だったとすれば、ゴーギャンのそれは、数倍も長い二年間の体験にもとづく生活記録である。とは言ってもゴーギャンの作品に虚構の蔭がまったくないというわけではあるまいが。ロティはララフとの現地方式の結婚を中心にこの小説を進行させたが、同じようにゴーギャンは現地の愛人ティティとの暮らしや、その後、妻と呼ぶようになったテハマナとの簡単な口約束による結婚を中心に、この島の思い出を語っている。

テハマナとの出会いとその後のなりゆきを、ダニエル・ゲラン編『ゴーギャン オヴィリ』（一九七四、ガリマール書店）（岡谷公二訳、みすず書房）によって、少しばかりたどってみる。オヴィリとは現地語で野蛮人の意味。なおゲラン、岡谷両氏によれば、これまでの流布版は、岩波文庫をはじめ友人モーリスによって大幅に手を加えられているとのこと。引用は岡谷訳に従う。（同書、九八～一三一参照）

ティティと別れてゴーギャンは「しばらく前から陰気になっていた。仕事にもその影響が出た。」そして数か月後に、しばらく島を回る旅を試みようかと決心する。親しくしていた隣人たちがゴーギャンの身を案じて別れを惜しむ。ヒティアというところの近くで、ひとりの島民に食事に誘われる。数名の男女が集まっている。四十歳ばかりの女が「どこへ行く？」と聞く。「ヒティアに行くんだ」「何しに？」「女を探しにね。ヒティアにはたくさん、きれいな子がいるっていうから」「一人ほしいのか？」「ああ」「ほしいなら、わたしがやろう、わたしの娘だ」「若いのかね？」「エハ（そうだ）」「きれいか？」「エハ」「丈夫か？」「エハ」「よろしい、つれてきてくれ」

娘が来てそばにすわったときゴーギャンは聞く。「わたしがこわくないか?」「アイタ (いいえ)」「わたしの家にずっと住んでくれるか?」「エハ」「病氣したことがあるか?」「アイタ」

これっきりだった。

しばらくしてもうひとりの母親、育ての親に紹介される。「あんたはいい人か?」「そうだ」「娘を幸せにするだろうね」「すると」「一週間たったら、帰してもらいたい。そのときこの子が幸せでなかったら、もう戻さないよ」

ゴーギャンの知り合いのフランス人女性のなかには、このテハマナを売春婦扱いにする者もいた。しかしゴーギャンはこの女性とテハマナとの関係を「寄る年波が、咲き出ようとする花を見つめている」のだとして意に介さない。二人の生活は実に単純で、「天国にいるみたいに、生まれたままの、ありのままの姿で、近くの小川に水浴びに」いくのだった。テハマナは星にとっても興味を持っているが、地球が太陽の回りを回っているということが、なかなかのみこめない。

二年余り後に「家庭のやむをえない用事で」、ゴーギャンはフランスに戻る。「さらば心やさしき土地よ。」ゴーギャンは「二歳年をとったが、二十歳若返り、いっそう野蛮になり、それなのにいっそう賢くなって」タヒチを立ち去った。

『ノア・ノア』、この「かぐわしい」という意味のタヒチ語をかかげた生活記録は、この「やむをえない家庭の事情」で、唐突に幕が引かれる。ゴーギャンが後に再びタヒチを訪れたことはこの章の冒頭で触れたとおりだが、前回ほどの幸運には恵まれなかったらしい。文明化が進み、ゴーギャンの最も嫌った官憲の取締りが厳しくなり、タヒチの〈夢のような生活〉は、二度とは味わうことができなかつたのである。

ゴーギャンは若いころはパリで有能な株式仲買人として働く一方、絵画にも情熱を傾けていた。それが株の暴落を機に一八八三年以降、仕事を捨て、家族と離れて暮らし、画家を本業とするようになっていった。そしてとどのつまりは、タヒチに移り住み、さらにヒヴァ・オア島で野生的な暮らしを送って、そこで死んだのである。ゴーギャンのこの破天荒な生き方に興味をいだいたイギリスの作家サマーセット・モームは、一九一六年にタヒチに取材旅行に出かけ、やがてゴーギャンを、『月と六ペンス』(一九一九)の主人公チャールズ・ストリックランドのうちに、作家の心理的洞察を加味して再現した。

ロティやゴーギャンのほかにも、南海の魅力に取り憑かれた者は少なからずある。ダニエル・マルグロンの『文学に表われたタヒチ』(一九八九)には、十八世紀から二十世紀にかけてポリネシアにひかれ、著作を残した者百名以上が、略歴を付してリストアップされている。なかでも際立っているのは、『宝島』(一八八三)『ジークル博士とハイド氏』(八六)などでおなじみのロバート・ルイス・ステューブンソン(一八五〇～九四)であろう。彼は一八八八年、すでに作家としての地位を確立していたにもかかわらず、また結核に冒されていたにもかかわらず、文明社会を捨ててポリネシアに赴きマルキーズ諸島、タヒチ島に滞在したあと、九四年にサモワ諸島で生涯を終えたのである。

メルヴィルやロティが南海の魅力を味わったとはいうものの、比較的短期間の滞在の後に結局は本国に戻ったのに比べると、ゴーギャンやステューブンソンのように南海で生涯を終えた人々の執念の深さには驚きの気持ちを禁じえない。ゴーギャンの死の直前のことば、「私は野蛮人だし、今後も野蛮人のままでいるつもりだ。」タヒチをテーマにした大作「われわれはどこから来たのか、われわれは何者か、われわれはどこへ行くのか」(一八九七)を生み出したゴーギャンは、ひたすら南海を目指す宿命的な人生コースをたどりながら、単に未開人に憧れをいだくにとどまらず、文明社会を捨てて野蛮人になりきろうとする覚悟を固め、それを実行したのである。

ジロドゥー（一八八二～一九四四）

タヒチ島は二十世紀に入ってもなお、〈善良な未開人〉さがしの文学のテーマとして命脈を保ちつづけていた。一例をあげると、一九三五年初演のジャン・ジロドゥー作『クック船長航海記異聞』にも、タヒチ島がとりあげられている。ロティヤゴーギャンによって体験され、文学作品や絵画作品として表現された十九世紀半ばのタヒチ島は、現実には、すでに結核や梅毒に象徴される文明の害毒に冒されていたのだが、それでもなお自由奔放な生活、半ば未開人的な生活に憧れる者の望みをかなえてくれる夢の島として、描き出されていた。

ロティヤゴーギャンのタヒチと比べると、ジロドゥーのタヒチは、書かれたのは二十世紀ながら、時代は十八世紀にまでさかのぼって一七六九年に設定され、近代文明による汚染以前の状況が再現される。題名からすぐに思い浮かぶのは、十八世紀のデイドロの『ブーガンヴィル航海記補遺』である。発想も表現も、デイドロのあの有名なカリカチュアとさほど変わっていない。

ブーガンヴィルがタヒチに寄港したのは一七六八年であるから、クック船長はそのわずか一年後に来航したことになる。いずれもヨーロッパの先進文明国の探検隊の来航という歴史上の事実を踏まえてはいるが、デイドロの作品と同じように、ジロドゥーもこの作品を喜劇として、軽いタッチで仕上げているのは、一読して明らかだ。しかし喜劇とはいえ、労働とは、所有とは、道徳とは何かとの、未開社会から文明社会への問いかけには、重い意味が暗示されている。

自然のもたらす豊かな衣食住の恵みのおかげで労働の必要がないこの島の住民に、労働の神聖さを教えるのは、至難の業であるとともに、無意味でもある。したがって労働の結果としての所有の観念も島の住民には理解しがたい。「おまえのもの、おれのもの」の区別があいまいで、むしろ「おまえのものは、おれのもの」であるこの島では、そもそも盗みが悪であるという意識が希薄なのである。そこで島民たちは、イギリスの船員たちの制服の「金ボタンめがけて」殺到することになる。

盗みの意識が希薄であるとすれば、文明社会の道徳観念を理解することもむずかしくなるのは、理の当然である。ジロドゥーは特に性道徳の問題に焦点をしばって、喜劇化を徹底させている。島の族長は遠来の客バンクス（クック探検隊付博物学者）に対する〈礼儀〉として、自分の未婚の娘を入れて三人の若い女性のなかから一夜の相手を選べと迫る。バンクスは、子供をつくるという目的以外では女性に近づかないのが道徳観念の基本だ、と説明して辞退するが、族長はこれをバンクスは道徳観念に基づいて子供をつくりたいのだと〈理解〉し、さっそく娘のタヒリリに、バンクスさんがおまえを選んだと告げる。

タヒリリが島の男たちのだれからも子供を産ませてもらえず、肩身のせまい思いをしていたのを父親は知っていたからである。タヒリリはおおいに喜んで、バンクスに同行してきたバンクス夫人にこう言う。「三十年来、たったひとりだって！一万一千夜も、ミスター・バンクスといっしょに暮らしたんなら（……）わたしのそばにミスター・バンクスを寝かせて、わたしに双子を産ませるぐらい、おまえさんには何でもないことじゃないか！」

一方、バンクス夫人に子供がないことを娘タヒリリから知った族長は、これまた〈礼儀〉として自分の息子を含めて三人の男を連れてきて、バンクス夫人に子供を産ませようと申し出る。

これはまさしくデイドロの直系の後継者とみなしてよいであろう。あえて両者の相違を求めるとすれば、それはデイドロのタヒチには、想像力の所産とはいえ、まだいくらかの現実味が感じられたが、ジロドゥーのタヒチは現実味をまったく度外視した、徹底した架空の喜劇として構成されていることであろう。

結 び

クリストバル・コロンが新大陸アメリカで——コロン自身はインドと思っていたが——最初に目にした未開人は、裸で、気前がよくて、人を信じやすく、人なつこかったが、一面ではとても臆病であった。彼等はたぶん〈善良〉と呼ばれてもおかしくはない住民だったろう。しかしコロンのそうした印象と同時に、この〈善良さ〉こそ奴隷にふさわしい素質と見抜いて、彼がアラゴン王国の計理官でよき理解者であったサンタンヘル宛に送った報告書第一信に書いたそのとおりに、事態はその後急速に未開人を奴隷化する方向に進んでいった。西インド諸島の未開人たちは、十数年のうちにすべて奴隷にされ、苛酷な労働を強いられ、数十年のうちにほとんど死に絶えた。一方、大陸部に居住していたアステカ族・インカ族などは、西欧文明とは異質ながら高度な文明を持っていたのだが、彼等の人身御供や人肉食を疑われた残虐な風習は、キリスト教を信奉する西欧人には許容しがたいものであった。善良な未開人のイメージは、一転して残虐な野蛮人のイメージに変わってしまった。

しかしそうした野蛮人よりも西欧人はなおいっそう残虐ではないのか、とのモンテーニュの指摘と反省は、モンテーニュ自身の予測を上回る絶大な効果を発揮し、ベールのこれとは正反対の意見をも圧倒して、十八世紀には、地球上のどこか未知の土地にいるのかもしれない未開人の善良さへの期待と憧れは、最高度に達する。しかし新大陸の先住民については、その善良さへの期待は、実態が認識されるとともに次第にうすれてゆき、代わって太平洋の島々、特にタヒチ島が待望の熱いまなざしにさらされる。

だがこの島が、発見当初からすでに必ずしも〈夢の島〉ではなかったことは、当論文の(Ⅳ)ですでに述べたとおりである。コロンが「まことにすばらしい眺め」「まことにすばらしい島」などと見た西インド諸島の島々も、またその後ヨーロッパ人の入り込んだ大陸の奥地も、襲撃を企てる〈野蛮人〉ばかりか、猛獣（ジャガー）、吸血コウモリ、大蛇などが住み着き、害虫（蚊、ハエ、ダニ）がはびこり、寄生虫がひそみ、未知の病気が蔓延する恐ろしい土地でもあった。こうしてみると、どうやら〈善良な未開人〉のイメージも単なるイメージにすぎず、〈善良な未開人〉の住むアルカディアという考えも、きわめて皮相的なものにすぎなかったように思えてくる。ユートピアという呼称が「どこにもない」という意味の合成語であるとするれば、〈善良な未開人〉とは「どこにもない」という意味でのユートピアの住民であったとも言えよう。〈善良な未開人〉説が、〈神話〉とか〈伝説〉とか言いならわされているのも、理由のないことではない。それは〈虚構〉とも〈幻影〉とさえも言ってもよいものなのかもしれない。〈善良な未開人〉というのは、今ではルソーの〈自然人〉と同じように、抽象的な観念としてのみ、そしてまたそれなりの憧れの対象としてのみ、意味を持つものであろう。

モンテーニュは十六世紀の半ばに、食人種の住む国アメリカ新大陸を念頭において、「この国にはいかなる種類の取り引きも、学問の知識も、数の知識もない。役人という名前も、政治家という名前もない。奴隷の使用も、貧富の差もない。……」と書き記した。しかし新大陸の先住民は、実はそれらのほとんどすべてを持っていたことが、その後明らかになった。彼等が未開とみなされていたのは、ただ視点がちがいが、見解がちがいが、価値判断の基準がちがっていたというだけのことだったのである。一方、モンテーニュの『エッセー』の章題に使われた食人種というイメージもまた、現代では再検討を迫られている。W・アレンズは『人喰いの神話』（一九七九）で、人肉食の記述を詳しく検討した結果、その記述はほとんどが本人の実見にもとづくものではなく、伝聞によるものに

すぎないことがわかったと、自信を持って断言している。前々回の論文(I)のピエール・ペールの引用でも、それは確証からはほど遠い「……という」という伝聞の形であらわれている。

アレンドの言うところでは、話をおもしろくするために、人食いの話は、常に誇大に伝えられる傾向があり、他の種族をさして「あれは人食い人種だ」と呼ぶのは、よく見受けられる例であり、迷信にもとづく特殊な場合は別として、人肉を常食にしていた人種はまずない、と言ってよいそうである。だとすれば、人肉食と表裏一体だった未開人の残虐性もまた、その善良さと同様にあいまいにならざるをえない。

隣国中国関係では、古くは桑原隲蔵の『東洋文明史論』（東洋文庫）、最近では中野美代子の『カニバリズム論』（福武文庫）などのほか多くの研究例があるが、残念ながらその引用例がどこまでが事実なのか、文学的虚構なのか、判断する資格がない。避けて通るほかはない。中国の奥地の未知の領域にあるいは住んでいるのかもしれない中国版〈善良な未開人〉についても、同様に避けて通るほかはない。

たしかに〈善良な未開人〉説には、あいまいなところがある。食人種についても同様である。ある状況下で未開人が善良であることは十分に考えられるし、また事態が急変すれば、善良から残虐へ変貌することもあるだろう。火あぶり、皮剥ぎ、寸断、人肉食もあえてするかもしれない。しかし「ある状況下で」こうした変貌が起こりうるのは、何も未開人にかぎったことではあるまい。文明人についてもまったく同じことが言えるのではないか。

現代では、未開と文明との差は急速にちぢまったり、あいまいになったり、場合によっては逆転したりするようになってきている。これは工業化社会の発展の帰結であることは言うまでもないことであるが、一面においては文化人類学の進歩の帰結でもあるらしい。工業化社会発展の一例を、シャルボノー『バビロンの庭』（一九六九）から要約して引用すれば、「昔はインディアンに、黄金と引き替えにガラス玉を与えていたが、今では工業生産物を与えて、それと引き替えに未開世界の魂を要求しているのである。」（第三部第二章の三「知識人と善良な野蛮人」参照）そしてまた文明社会の研究者たちによる未開社会の研究は、それが熱意をもって進められれば進められるほど、その内部に文明が導入されるきっかけを与えることになり、未開社会は徐々に本来の姿を失い、未開社会ではなくなっていくであろう。

そしてこれは遠い未来の趨勢に対する見通しなどではない。これまで習慣的に使ってきた未開とか未開人とかいう用語さえもが、今や差別用語の一種として再検討の対象になりつつあるのだから。この傾向をさらに急速かつ強力に押し進めているのが、混血の問題である。コロンのアメリカ大陸到達以来五百年のあいだに、純粋な先住民の数は減少の一步をたどり、代わってアフリカ大陸から「運び込まれてきた」黒人の数は顕著な増加の傾向を示している。

かつて〈善良な未開人〉の原形となったアメリカ先住民の、残り少なくなった一部の人々は、古来の生活形態を守り続けようと努力しているが、一方では、強制的な教化政策の下で文明社会への同化の道を選んでいる先住民も多い。今ではもうそうした先住民や黒人を未開人などと呼ぶことは許されない。これは先進国・後進国という対比的な表現が次第に不都合になり、後者を開発途上国からさらに発展途上国という呼称に格上げしていったいきさつと似ている。こうした平均化の傾向は今後急速に広まっていくことであろう。したがってそれとともに、この論文の題として使った〈善良な未開人〉という用語も、次第に使いにくくなっていき、やがてまったく使えなくなってしまう時が、遠からずやってくるであろう。そして〈善良な未開人〉説もまた、まさしく神話以外の何物でもなくなってしまうであろう。

参考文献

「善良な未開人の虚像と実像」(I)関連

- 1 岩波書店『大航海時代叢書』第一期の第一巻、コロンブス他『航海の記録』(林屋永吉訳)。第二期の第十三巻、ディエゴ・デ・ランダ『ユカタン事物記』(林屋永吉訳)。第十五巻、シエサ・デ・レオン『インカ帝国史』(増田義郎訳)。第十九巻『フランスとアメリカ大陸』(一)のジャック・カルティエ『航海の記録』(西本晃二訳)、アンドレ・テヴェ『南極フランス異聞』(山本顕一訳)。第二十巻『フランスとアメリカ大陸』(二)のジャン・ド・レリー『ブラジル旅行記』(二宮敬訳)
- 2 岩波文庫『コロンブス航海記』(林屋永吉訳)、ティトゥ・クシ・ユパンギ述『インカの反乱』(染田秀藤訳)、バルトロメー・デ・ラス・カサス『インディアスの破壊についての簡潔な報告』(染田秀藤訳)、ミシェル・ド・モンテーニュ『エッセー』(原二郎訳)
- 3 石田英一郎『マヤ文明』(中公新書)
- 4 高山智博『アステカ文明の謎』(講談社現代新書)
- 5 マリアヌ・マン＝ロ『イスパノアメリカの征服』(染田秀藤訳、クセジュ文庫)
- 6 ジャック・スーステル『アステカ文明』(狩野千秋訳、同)
- 7 アンリ・ファーヴル『インカ文明』(小池佑二訳、同)
- 8 増田義郎『古代アステカ王国』(中公新書)、『新世界のユートピア』(中公文庫)、『インカ帝国探検記』(同)、『黄金郷に憑かれた人々』(NHKブックス)、「新大陸におけるユートピア」(《思想》一九七一年五月号)、「インディオの人権問題とラス・カサス」(同、九月号)
- 9 泉靖一『インカ帝国』(岩波新書)
- 10 ツヴェタン・トドロフ『他者の記号学』(原題『アメリカの征服』一九八二)(及川馥ほか訳、法政大学出版局)
- 11 オクタビオ・パス『孤独の迷宮』(一九五〇、一九七〇)(高山智博ほか訳、法政大学出版局)
- 12 ルイス・ハンケ『アリストテレスとアメリカインディアン』(佐々木昭夫訳、岩波新書)
- 13 ピエール・ベール『歴史批評辞典』(一六九五～九七)(野沢協訳、法政大学出版局)

「善良な未開人の虚像と実像」(II)関連

- 1 A・リシュタンベルジェ『十八世紀社会主義』(一八九五)(野沢協訳、法政大学出版局)
 - 2 P・J・マーシャル&G・ウィリアムズ『野蠻の博物誌——十八世紀イギリスがみた世界』(一九八二)(大久保桂子訳、平凡社)
 - 3 アフラ・ベイン『オルノーコ』(土井治訳、岩波文庫)
 - 4 J・ロック『市民政府論』(鶴飼信成訳、岩波文庫)
 - 5 モンテスキュ『ベルシャ人の手紙』(一七一二)(根岸国孝訳、筑摩書房、世界文学大系、十六)
 - 6 R・ボルト『ミッション』(?年)(ヘラルド出版、増田義郎解説)
 - 7 ヴォルテール『アルズィール』(一七三六)(プレイヤード叢書)、『風俗試論』(一七五六)(同)、『カンディード』(一七五九)(吉村正一郎訳、岩波文庫)、『哲学辞典』(一七六四)(高橋安光訳、法政大学出版局)、『自然児』(池田薫訳、一七六七)(河出文庫)、『ジェニの物語』(一七七五)(プレイヤード叢書)
 - 8 ルイ＝セバスティアン・メルシエ『未開人』(一七六七、Société Typographique à Neuchatel)
 - 9 サン＝ランベール『二人の友——イロクォイ人の物語』(一七七〇)(橋本到訳、同人誌《faune》第八号、一九九〇)
 - 10 ジャン＝ジャック・ルソー『人間不平等起源論』(一七五五)(小林善彦訳、岩波文庫)、『エミー
- (193)

- ル』(今野一雄訳、岩波文庫)、『新世界発見』(一七七六)(宮治弘之訳、白水社、「ルソー全集」十三)
- 11 デフォー『ロビンソン・クルーソー漂流記』(平井正穂訳、岩波文庫)
 - 12 ミシェル・トゥルニエ『フライデーあるいは太平洋の冥界』(一九六七)(榊原晃三訳、岩波書店)
 - 13 ブーガンヴィル『世界周航記』(一七七七)(山本淳一訳、岩波書店)
 - 14 デイドロ、書評「世界周航記」(一七七七執筆)、『ブーガンヴィル航海記補遺』(一七七二執筆)(浜田泰佑訳、岩波文庫)
 - 15 ジャン＝フランソワ・マルモンテル『インカ帝国の滅亡』(一七七七)(湊野ゆり子訳、岩波文庫)
 - 16 フランソワ・G・ラベルーズ『ラベルーズ世界周航記、日本近海編』(一七九七)(小林忠雄編訳、白水社)
 - 17 マルキ・ド・サド『アリーヌとヴァルクールあるいは哲学的物語』(一七九五)(原好男訳、水声社「サド全集」第九巻、第三十五の手紙)

「善良な未開人の虚像と実像」^④関連

- 1 コンドルセ『人間精神進歩史』(一七九五)(渡辺誠訳、岩波文庫)
- 2 J. スタロバンスキー『病のうちなる治療薬』(一九八九)(小池・川那部訳、法政大学出版局)
- 3 シャトブリアン『アタラ』(一八〇一)(辻昶訳、旺文社文庫)
- 4 ユゴー『ビュグ・ジャルガルの闘い』(一八二六)(辻昶、野内良三訳、潮出版社)
- 5 ダーウィン『ビーグル号航海記』(一八三九)(島地威雄訳、岩波文庫)
- 6 ジャン・ラスパイユ『アラカルフ』(一九八六)(三輪秀彦訳、白水社)
- 7 リチャード・L・マークス『ビーグル号の三人——艦長とダーウィンと地の果ての少年』(一九九一)(竹内和世訳、白楊社)
- 8 ディケンズ「ハウスホールド・ワーズ」(一八五三年六月十一号)
- 9 リチャード・D・オールティック『ロンドンの見世物Ⅱ』(一九七八)(小池滋監訳、国書刊行会)
- 10 馬場優子「人種主義と人種の偏見」(一九七七、雄山閣出版「人類学講座7『人種』)
- 11 メルヴィル『タイピー』(一八四六)、『オムー』(一八四七)(坂下昇訳「メルヴィル全集」一～二、国書刊行会)
- 12 酒本雅之『沙漠の海——メルヴィルを読む』(一九八五、研究社)
- 13 中村紘一『メルヴィルの語り手たち』(一九九一、臨川書店)
- 14 ルーシー・マドックス『リムーヴァルズ』(一九九六)(丹羽隆昭監訳、開文社出版)
- 15 ロティ『ロティの結婚』(一八八〇)(津田穰訳、岩波文庫)、『お菊さん』(一八八七)(野上豊一郎訳、岩波文庫)、『秋の日本』(一八八九)(村上菊一郎、吉永清訳、角川文庫)、『ロティのニッポン日記』(一八八五～一九〇一年)(船岡末利編訳、有隣新書)
- 16 落合孝幸『ピエール・ロティ——人と作品』(一九九二、駿河台出版社)
- 17 ゴーギャン『ノア・ノア』(前川堅市訳、岩波文庫)、ダニエル・ゲラン編『オヴィリ——野蠻人の記録』(一九七四)(岡谷公二訳、みすず書房)
- 18 ペギー・ヴァンス『世界の巨匠 ゴーギャン』(一九九一)(廣田治子訳、岩波書店)
- 19 市川慎一「十八世紀フランスにおけるアメリカ観」(早稲田大学、文学研究科紀要本冊第三七輯、文学・芸術編、一九九一)、「私のタヒチ幻想——オルセ美術館でデイドロとゴーギャンを想う」(丸善《学燈》一九九三年三月号)
- 20 ベルナル・シャルボノー『バビロンの庭——自然という名の幻想』(一九六九)(鷲見洋一、原

- 好男訳、思索社)
- 21 ジロドゥー『クック船長航海記異聞』(一九三五)(原千代海訳『ジロドゥ戯曲全集』第四巻、白水社)
 - 22 川端香男里『ユートピアの幻想』(一九七一、潮出版社)(講談社学術文庫)
 - 23 ウィリアム・アレンズ『人喰いの神話——人類学とカニバリズム』(一九七九)(折島正司訳、岩波書店)
 - 24 岡倉登志『「野蛮」の発見、西欧近代の見たアフリカ』(講談社現代新書)
 - 25 西丸震哉『さらば文明人』(一九九一、ファラオ企画)
 - 26 正木恒夫『植民地幻想——イギリス文学と非ヨーロッパ——』(一九九五、みすず書房)
 - 27 田中雅一編著『暴力の文化人類学』(一九九八、京都大学学術出版会)

Montaigne, Michel de : *Essais, 1580~1595* (Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade)

Raynal, Guillaume Thomas François : *Histoire philosophique & politique des Deux Indes, 1770* (Librairie François Maspero, 1981)

Chinard, Gilbert : *L'Exotisme américain dans la littérature française au XVIIe siècle*, Hachette, 1911

Gonnard, René : *La Légende du bon sauvage*, Médicis, 1946

Devèze, Michel : *L'Europe et le monde à la fin du XVIIIe siècle*, Editions Albin Michel, 1970

Mouralis, Bernard : *Montaigne et le mythe du bon sauvage*, Bordas, 1989

Lahontan : *Œuvres complètes I et II*, Les Presses de l'Université de Montréal, 1990

Roelens, Maurice : *La Hontan, Dialogues avec un sauvage, Introduction et notes*, Editions Sociales, 1979

Le Bon sauvage — illusion et réalité —

Takeo KOIKE

Le chapitre très connu de *Cannibales* des *Essais* de Montaigne fut à son insu reçu favorablement par les philosophes du 18^e siècle en France. Voltaire, Rousseau et d'autres cherchèrent l'image du bon sauvage respectivement dans leurs ouvrages, parce qu'il n'y avait plus naturellement de véritable bon sauvage; celui-ci était devenu esclave et s'il se révoltait, il était supprimé.

Voyage autour du monde (1771) de Bougainville transforma cette recherche idéaliste du bon sauvage en celle du bon sauvage dans le monde réel, c. - à - d. il présenta aux Européens l'île de Tahiti comme le jardin d'Eden. Plus tard au 19^e siècle plusieurs savants, écrivains, artistes comme Darwin, Melville, Loti, Gauguin etc. visitèrent cette petite île très éloignée du Sud - Pacifique. Même au 20^e siècle, Giraudoux écrivit par exemple *Supplément au voyage de Cook* dont la scène était aussi l'île de Tahiti.

Loti, officier de marine française, eut l'air d'avoir trouvé de bons sauvages dans l'île de Tahiti en 1872. Rarahu de son *Mariage de Loti* (1880) est le symbole de jeunes Tahitiennes qu'il aima. Quand il fit escale à Nagasaki une douzaine d'années plus tard, il espéra trouver encore une bonne fille sauvage au Japon qui, aux yeux des Européens, sortait tout juste de l'état sauvage. Mais Okanesan qui fut son épouse durant un mois ne put répondre suffisamment à l'attente de Loti. cf. *Mme Chrysanthème* (1887).

Hearn vint au Japon cinq ans après Loti, comme journaliste. A peine arrivé au Japon, il s'éprit de tout. Il se peut qu'il ait trouvé de bons sauvages surtout parmi les gens de la ville de Matsue. Il épousa une japonaise et put jouir de la vie familiale pour la première fois, mais voyant le Japon se diriger vers le militarisme, il revint de ses illusions avant sa mort (1904) qui le frappa trop tôt.

De même que l'utopie ne se trouve nulle part, le bon sauvage serait introuvable. De plus, le mot sauvage lui-même est devenu difficile à employer à cause d'une nuance discriminatoire. Le thème du mythe du bon sauvage ne serait rien d'autre que le vrai mythe dans un proche avenir.